

資本蓄積と資本主義の腐朽化について

宇 藤 義 隆

レーニンは、「帝国主義論」第8章において、資本主義の寄生性と腐朽化について述べている。そこではまず、資本主義の腐朽化についての定義が、きわめて簡単にあたえられ、残りの部分において、資本主義の寄生性と、その結果である労働運動における日和見主義の現象について、説明がなされている。だが、そのさい、資本主義の寄生性と腐朽化というふたつの概念の間に、どのような関連があるかについては、ほとんど、説明されていない。

したがって、われわれは、この小論で、このふたつの概念の関連を資本蓄積の観点から究明し、この問題の解明の際に、「帝国主義論」の理論は、マルクスの「資本論」の理論と、どのような関連をもっているかを検討しよう。¹⁾ さらに、資本主義の腐朽化の現代的意味を述べる場合には、われわれは、現代資本主義論の方法論、すなわち、現代資本主義を論ずる場合に、「帝国主義論」の理論がどのように展開されなければならないかを検討するであろう。

現代資本主義論のひとつの特徴は、全般的危機の単純化論法としての資本主義絶対的停滞論に対する反動として、レーニンの独占理論、市場理論における生産力上昇の面を、強調することである。たしかに、レーニンの理論には、第1部門の優先的発展の法則、独占の生産力上昇性の指摘がなされているのだが、同じレーニンの理論の中に、〈しかし、もちろん、それだからといって、生産手段の製造が消費資料の製造からまったく独立してまたそれとはなんらの連関もなく発展することができるということには、けっしてならない。〉（「いわゆる市場問題について」、国民文庫版72ページ）〈いまやわれわれはさらに、帝国主義のきわめて重要な一面について論じなければならない。この一面は、この題目にかんする大多数の論文のなかで、多くのばあい不十分にしか評価されていないものである。マルクス主義者ヒルファーディングのひとつの欠点は、彼が非マルクス主義者ホブソンとくらべて、この点では一步後退していることである。われわれのいうのは、帝国主義に固有の寄生性のことである。〉（「帝国主義論」国民文庫版141ページ）という考えが、強くだされていることを、一般の資本主義論者は、重視しないらしい。この点において、彼等は、一部公式論者

1) 従来、この2つの理論の関連については、「原理論」、「段階論」によって、方法論的に区別がなされている。無論、レーニンも述べているように、帝国主義は、資本主義の歴史的段階である点には、異論はないが、論理的関連がないとはいえない。むしろ、本文で述べるように関連が深いのである。この関連については、「プラン問題」の解明も重要であるが、資本蓄積の歴史的展開という観点から、20世紀初頭のドイツにおける「蓄積論争」を、K・カウツキーの「帝国主義論」、R・ヒルファーディングの「金融資本論」とも関連させて再評価する必要があると考える。

とは別の極端におちいっている。したがって、この小論は、現代資本主義論に対するひとつの反論でもある。

I 資本主義の腐朽化と寄生性

レーニンは、「帝国主義論」第8章において、資本主義的独占が他のすべての独占と同様に停滞と腐朽化との傾向をうみだすとして、《たとえ一時的にもせよ独占価格が設定されるかぎり、それに応じてある程度まで、技術的進歩にたいする——したがってまたいっさいの他の進歩、前進運動にたいする——刺激的要因が消滅し、さらにまた、技術的進歩を人為的に阻止する経済的可能性があらわれる。》(前掲142ページ)と述べている。だが、その際、独占によって資本主義の生産力が絶対的にも低下すると考えることは誤りであるとして、レーニンは、《もちろん独占は、資本主義のもとでは、競争を世界市場から完全にまた非常に長期にわたって排除できるものではない。(超帝国主義論のナンセンスなことの理由のひとつは、とりわけこの点にある)。もちろん、技術的改善によって、生産費を低下させ利潤を増大させる可能性があるために変化がうながされる。》(142ページ)と述べ、結局、《独占に固有の停滞と腐朽化との傾向は、それはそれとして作用をつづけ、個々の産業部門や個々の国々で、ある一定期間勝ちを制する》と論じている。

レーニンは、以上で、腐朽化についての説明を終り、資本主義の腐朽化との関連について指摘することなしに、¹⁾ 資本主義の寄生性について、《帝国主義とは、すでに見たように、ある少数の国々における、有価証券で1000億～1500億フランにもたつする貨幣資本の膨大な累積のことである。その結果、金利生活者、すなわち《利札切り》で生活している人々、どんな企業にもまったく参加していない人々、遊惰をもってその職業としている人々の階級が、もっと正確にいえば、こういう人々の階級が、異常に発達するにいたる。帝国主義のもっとも本質的な経済的基礎のひとつである資本輸出は、金利生活者の層の生産からのこの完全な離脱状態をますますつよめ、いくつかの海外の諸国や植民地の労働の搾取によって生活している国全体にたいして、寄生性という烙印をおす。》(142～143ページ)と規定している。したがって、寄生性の説明においては、資本主義の腐朽化との関連が、レーニンにとって、かならずしも明白でなく、理論的でないように思われる。

われわれは、われわれ自身の見解をだす前に、レーニンの他の著作、すなわち、《帝国主義と社会主義の分裂》の中に、このふたつの概念の関連について述べた文章をさがしてみよう。

レーニンは、そこで、帝国主義が、寄生的な、または腐朽しつつある資本主義であるという指標を5つあげている。

- I. 生産手段が私有されているばあいのあらゆる独占の特徴である腐朽への傾向にあらわれている。
- II. 資本主義の腐朽は、金利生活者、すなわち《利札切り》で生活する資本家の膨大な層が形づくられていることにあらわれている。
- III. 資本輸出は、自乗された寄生性である。
- IV. 《金融資本は支配を志向するものであって、自由を志向するものではない。》あらゆる分野での政治

¹⁾ 《広大な、富裕な、あるいは位置のよい植民地の領有の独占もまた、同じ方向に(腐朽化)作用する。》というレーニンの文章は、このふたつの概念の関連を示唆しているとも考えられるが、これは、あくまでも植民地領有の独占による、腐朽化傾向の説明である。寄生性が、かならずしもすべて植民地領有の独占だけではないから、ふたつの概念の関連の説明としては、不十分である。

的反動——これが帝国主義の特性である。買収、大じかけな収賄、あらゆる種類の疑獄。

V. 領土併合と切りはなしえないようにむすびついている被抑圧諸民族の搾取、そして、とりわけひとにぎりの《強》国による植民地の搾取は、ますます《文明》世界を幾億の非文明諸民族の団体についた寄生物にかえつつある。

レーニンの第1の規定は、「帝国主義論」での、資本主義の腐朽化の規定と同じであるが、独占一般ではなく、生産手段が私有されているばあいの独占において、腐朽への傾向があらわれること、すなわち、生産の集積による生産力の巨大な発展は、生産手段を私有とする資本主義社会においてのみ、その生産関係と、するどく衝突し、腐朽化の傾向を生み出すのであることが認識されなくてはならない。

第2の規定は、現在われわれが問題としているふたつの概念の関連に対する、レーニンの考えを知る場合、非常に重要な規定だと思われる。資本主義の腐朽化が、金利生活者の形成の中に現われているという規定は、資本主義生産様式における、生産力と生産関係の矛盾は、恐慌に現われているという規定と、同じ規定のし方である。われわれは、この規定から、資本主義の寄生性とは、資本主義の腐朽化の歴史的、具体的な現象形態であるという結論を導くことができる。では、ふたつの概念の関連をこのように規定した方が、なぜ良いか述べてみよう。この場合、レーニンによって、きわめて簡単に規定された資本主義の腐朽化という概念を、さらに詳しく規定する必要がある。

封建社会にかわって、資本主義社会が、歴史的に進歩的な役割をはたしたのは、一部の特権階級の支配を打倒し、市民階級が、支配し、利潤追求を原理として、封建社会より急速に生産力をたかめることが出来たからである。独占を生みだす以前の、自由競争が支配した産業資本主義の時代には、個々の資本家は、一定の利潤を確保し、さらに他の資本家より多くの利潤を獲得するためには、商品の生産費を低下させることが必要であり、この為には、新しい生産性の高い優秀な機械を購入しなければならず、蓄積につぐ蓄積が至上命令であった。ここに、生産力の異常な発展の秘密があったのだ。だが、資本主義社会は、資本家による労働者の搾取を基礎とする社会であり、生産力の発展は、資本主義の生産関係と矛盾するに至る。

《この転化過程のあらゆる利益を横奪し独占する大資本家の数のたえざる減少につれて、貧困・抑圧・隷属・頽廃・搾取の度合が増大するが、しかしまた、たえず膨脹するところの、そして資本制的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織されるところの、労働者階級の反逆も増大する。資本独占は、それと共にまたそれのもので開花した生産様式の桎梏となる。》（『資本論』、青木文庫版、第1巻24章7）とマルクスは、生産力と生産関係の矛盾を資本蓄積との関連でとらえている。生産の集積による独占の発生は、なによりも、生産力の巨大な発展により生産関係との矛盾を深める。資本主義の腐朽化は、独占にその原因を求めることは正当であるが、資本主義的独占が、生産力と生産関係の矛盾を深め、封建社会より、より急速に生産力をたかめた利潤追求という原理が、今や生産力のより以上の発展を阻止するものになったという点、資本主義が、生産力を高めるといふ歴史的に進歩的な役割をすではたさなくなった点にこそ、資本主義の腐朽化の原因がある。社会主義社会における独占企業は、したがって腐朽化の傾向をもたない。資本主義の腐朽化とは、資本主義の歴史的段階、過渡的な資本主義、死滅しつつある資本主義としての帝国主義段階に固有な概念である。産業資本主義の時代には、資本主義の腐朽化は存在しない。産業資本主義の時代において、約10年ごとの経済恐慌は、生産力と生産関係の矛盾を一時的に解決したが、この場合、生産力と生産関係との矛盾は、比較的まだ微弱であったから、資本主義は、まだ生産力をたかめるといふ進歩的な役割

をはたした。独占段階以後の資本主義が、歴史的使命を終えたものであることは、1917年11月のロシア革命の成功によるソビエト社会主義社会の成立、およびそれ以後の輝かしい発展によって証明されている。以上、資本主義の腐朽化について述べた。寄生性の説明は、レーニンの第3の規定と関連させて述べよう。

レーニンによる、資本輸出は、自乗された寄生性であるという規定を、われわれはどのように理解すべきであろうか。この理解のためには、「帝国主義論」第4章資本の輸出について考察しなければならない。¹⁾

レーニンは、資本輸出の原因として、先進国での膨大な「資本の過剰」について述べている。《もし資本主義が、現在いたるところで工業よりもおそろしく立ちおくらせている農業を発展させることが出来るならば、またもし、めまぐるしい技術的進歩があるにもかかわらず、いたるところで半飢餓の乞食のような状態にとりのこされている住民大衆の生活水準を資本主義がひきあげることが出来るならば——そのばあいには、もちろん、資本の過剰などということは問題となりえないだろう。……資本の過剰は、当該国の大衆の生活水準をひきあげるためには用いられないで——というのは、そうすれば資本家の利潤をひきあげることとなるから——国外へ、後進諸国へ資本を輸出することによって利潤をひきあげることに用いられるだろう。これらの後進諸国では、利潤の高いのが普通である。その理由は、資本がすくなく、地価は比較的に高くなく、労賃は低く、原料は安価だからである。資本輸出の可能性は、一連の後進国がすでに世界資本主義の軌道のなかにひきいれられ、鉄道幹線が開通するかまたは敷設されはじめ、工業発展の基本的諸条件がすでに保障されていることなどによって、つくりだされている。そして、資本輸出の必然性は、少数の国々では資本主義が「らん熟し」、資本にとっては（農業の未発達と大衆の貧困という条件のもとで）有利な投下の場所がない、ということによってつくりだされる。》（88～89ページ）。したがって、マルクスは「資本論」において、世界市場を捨象したのであるが、レーニンは世界資本主義を問題とせざるを得なかった。だが、その場合、資本輸出の必然性を、資本主義社会における生産力と生産関係の矛盾の激化、すなわち資本主義の一定の歴史的段階での資本主義の腐朽化に求める必要があるのではないか。先進国における《資本の過剰》という現象は、資本主義の腐朽化以外のなものでもない。先進国においては、生産の集積は、生産力を非常に高め、生産力と生産関係の矛盾を激化させ、自国における資本蓄積より、資本輸出を行わせた。これは、先進国の生産力の上昇を抑制する結果をもたらす。したがって資本主義発展の不均等は、《とくに資本力のもっとも強い国々（たとえばイギリス）の腐朽化のうちにあらわれ》るのである。また、レーニンの第5の規定によって明らかのように、《領土合併と切りはなしえないようにむすびついている被抑圧諸民族の搾取（資本輸出を媒介にして）は、ますます〈文明〉世界を幾億の非文明諸民族の団体についた寄生物にかえつつある。》その結果、先進国は金利生活国となり、金利生活者の層の生産からの完全な離脱をつよめ、生産力のより急速な発展を阻害するにいたる。だから資本主義の腐朽化は一層促進される。この意味において、資本輸出は、自乗された腐朽化であると規定することが出来る。

さて、われわれは、ここで、資本主義の腐朽化と寄生性の関連について整理しておこう。資本主義の腐朽化と寄生性とは、ある現象に対して、同じように使われる。例えば、《金利生活者は、寄生的な腐朽しつつ

1) 「帝国主義論」の篇別構成には若干の疑問がある。《資本主義の最近の発展局面》を論ずる場合、「資本論」の発展として、第1章 生産の集積と独占、第2章 銀行とその新しい役割、を述べて、第3章 金融寡頭制を規定することは正しいと思うが、第4章 資本の輸出を論ずる前に、資本蓄積の歴史的展開との関連において、資本主義の腐朽化を問題とすべきであろう。

ある資本主義の国家である」と。だが、上述したように、より本質的な概念は、資本主義の腐朽化であり、寄生性は、その現象形態であり、とくに、レーニンの時代においては、先進国と植民地との関係に最もよく現れた。われわれは、紙数の制限上、これについては以上にして、先に進むことにしよう。

レーニンの第4の規定は、「帝国主義論」では、ツァーリズムの検閲を顧慮して書かれたためか、単に、《独占の発生は、いっさいの他の進歩、前進運動にたいする刺激的要因が消滅する》と述べられているにすぎない。これは、単に、ツァーリズムの検閲を顧慮したためではなく、レーニンの時代には、資本主義の腐朽化のこの側面があまり重要な意味をもたなかったからではないか。レーニンが、「帝国主義論」第8章で、資本主義の寄生性と、この影響による、労働運動における日和見主義発生の経済的基礎の説明に、大半をさしているのは、資本主義の腐朽化の現象形態である寄生性が、この時代の最も顕著な現象であったからである。何故なら、レーニンが、序文で述べているように、《現在の戦争と現在の政治とを評価するうえに、それを研究しておかなければならぬものをも理解できない根本的な経済的な諸問題、すなわち帝国主義の経済的本質にかんする諸問題を解明する》(9ページ)のが、《平易な概説》の書である「帝国主義論」の目的であり、それは、独占段階の資本主義の体系的な理論的な解明をあたえるものではない。したがって、われわれは、資本主義の発展につれて、いよいよ重要さをますますと思われる、資本主義の腐朽化のこの側面を究明することにより、現代資本主義を論ずる場合の参考にしたい。従来、現代資本主義論や、窮乏化論争において、マルクス・レーニン主義の立場に立つ人々は、資本主義の腐朽化の傾向が、生産力と生産関係の矛盾に対して、どのような作用をおよぼすか、特に、《いっさいの他の進歩、前進運動に対する刺激的要因の消滅》について、あまり注意を払っていないように思われる。

われわれは、そこで、金融資本又は独占資本の下における、買収、大じかけな収賄、あらゆる種類の疑獄は、経済的にどのような意味をもっているか検討してみよう。

産業資本家にとっては、政府は、最も安価なものが、最上なものであった。政府の費用は、租税という形態をとって、結局、資本家の負担となり、彼等のために、より多くの利潤を保証する資本蓄積を阻害するからである。だが、現在においては、生産力と生産関係の矛盾の激化のあらわれとしての労働者階級の反抗の増大という現実を前にして、独占資本家にとって、蓄積率を低下させる支出の増大も、かならずしも不必要ではなくなり、彼等の地位の確保・強化のためには、多額の費用も問題にはならなくなり、買収、大じかけな収賄、あらゆる種類の疑獄は、けっして資本蓄積には役に立たないし、したがって生産力の上昇には役に立たない、だが、彼等の地位を確実にするという役に立つわけであり、腐朽化の傾向の現れである。これは、生産力の発展に対して、直接マイナス効果をあたえるだけでなく、保守党政治家に対する献金等々によって、社会の進歩に対して敵対する勢力の増大を助長するため、生産力の発展に対して、二重のマイナスとなる。だが、この場合、特に明記すべきことは、これらの諸要因は、生産力と生産関係の矛盾を、一時的ではあるが、弱める働きをしていることである。いままでの多くのマルクス経済学者は、資本主義の発展による生産力の上昇が、ただちに生産関係との矛盾の激化をひきおこすと結論したのだが、このような結論が、現実の諸現象と合致しない場合が、しばしばあったのは、一般に、資本主義の発展がある一定の歴史的段階に達すると、資本主義の腐朽化の傾向が生じ、一時的に、生産力と生産関係の間の矛盾を緩和する働きをすることを看過したことにあるだろう。

II 資本主義の腐朽化の、現代資本主義における役割について

われわれは、資本主義の腐朽化について、レーニンの「帝国主義論」での規定に満足することは出来ない。レーニンは、労働運動における日和見主義の発生の経済的基礎を、先進国による、海外からの超過利潤に求めている。われわれが、今日に至ってもなお、レーニンのこの規定しか理解出来ないならば、現代における諸現象を理解出来ないだろう。例えば、日本は、現在、植民地を領有していないし、海外における資本輸出市場をさえもっていない、したがって、レーニンが規定している寄生性的性格はきわめて弱くなっているわけであるが、それにもかかわらず、単に労働運動だけでなく、社会的・文化的諸現象に、広汎に日和見主義の影響を認めることが出来る。この説明は、前述した、資本主義の一定の歴史的段階における腐朽化によって、正しく理解出来る。資本主義の腐朽化の傾向は、今日のように生産力の異常に発達した段階においては、決して弱まるものではなく、たとえ、寄生性という形態をとらないとしても、別の形態をとって一層進行しているのである。したがって、現在の日本における、日和見主義発生の経済的基礎は、資本主義の腐朽化の傾向、具体的には、《物質的財貨をつくりださない労働者や事務員、流通部門、国家機関、軍隊、私的サービス部門にたずさわる労働者や事務員の数の増大》等々に求めることが出来る。

この場合、レーニンが、正しく指摘するように、独占資本主義、あるいは《国家独占資本主義》において、技術革新を阻止する傾向があるとはいえ、資本主義である以上、完全に競争を排除出来ないから、或る時期において、生産力の巨大な発展がないわけではない。それなのに、われわれは、何故、資本主義の腐朽化を強調するのか。それは、今日では、世界において、資本主義体制が唯一の体制ではなく、ソ同盟を中心とする社会主義体制が存在するからである。¹⁾ 資本主義の腐朽化は、社会主義経済体制に対する、資本主義経済体制の劣等性をあきらかにするものとなった。社会主義社会は、どんな社会主義を憎悪する人々に対しても、資本主義に代わる社会主義社会にとっては、生産力の上昇には制限がないことを事実によって証明するものとなった。資本主義の腐朽化は、社会主義社会に比較して、資本主義社会の生産力の上昇の速度を、たえず低下させる最大の要因となる。現代世界における独占資本主義の代表国、アメリカは、不生産的支出が多いことが実証されている。アメリカの政府支出中に占める軍事支出の割合が大きいことは、以前から指摘されていることであるが、最近では、《14兆円というカネを、たった1年間で、暇をつぶすための娯楽につかってしまっている国。それがアメリカである。このカネは、米国の軍事費に匹敵し、米国の国内総需要の1割弱を占める。》米国民が一切の暇つぶしをやめる決意を固めた瞬間、米国経済は異常な恐慌状態におちいるだろう。》と言われている。この結果、最近、ドルの価値低下、金の流出という現象が現れている。これは、アメリカ資本主義経済の生産力の発展速度の低下以外のなものではない。ここにこそ、米ソの経済競争の歴史的ならびに、理論的意義があると思う。無論、米ソの経済競争は、生産力の競争ではなく、どちらの体制が、国民の物質的・文化的な生活水準を高めるために、よりすぐれているのかの競争でもある。

(1961. 1. 20)

1) この点については、Die große sozialistische Oktoberrevolution-Ausgangspunkt und Basis der Verwandlung des Sozialismus in ein Weltssystem, SS. 13~89.